

カトリック香里教会 四旬節第2主日 2021年2月28日

[そのとき、]イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのである。すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。

一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。彼らはこの言葉を心に留めて、死者の中から復活するとはどういうことかと論じ合った。

—マルコ9章—

覚悟

敵の餌食を逃れて野菜から命の糧を得る青虫は、時がくると脱皮し、蝶になって空に舞い立ちます。これは、私たち信仰者の、自我を脱皮して新しい命へ変容させられる「復活信仰」を思わせます。「イエスの変容」の出来事は、地上から糧を得て生きながらえてきた私たちの体に、蝶のように脱皮して変容するなど想像すら出来なかったことを可能にしてくれる復活への揭示でした。人は、地上から糧を得た、肉の体のままの復活は不可能で、新しい命への変容が必要なのです。それは、いわゆる楽園から追放された人類を神の国に連れ戻すために、人にとっては関門であり、その関門を潜り抜ける覚悟なしには達成できない生き方を、イエスのご自分の「受難死」をもって教えられるのです。その覚悟とは、アブラハムの試練に見るように「神のために命を捨てる」ことに他なりません。しかし、悪魔が支配する自我に生きた体は、この覚悟を厭い、尻込みします。

臆病な幼児に力を得させる一番必要なのは、母親の存在です。イエスは弱い私たちの力となる母親となって、関門の前にすくんでしまっている私たちのところまでやって来られ、同伴して先導してくださるのです。栄光の神が赤子である私の母親として同伴してくださるのです。この神について行きさえすれば怖いものはありません。

旧約に於いて、預言者エゼキヤは律法を、モーセはエジプトの奴隷からの神の民の解放者として使命を終えましたが、イエスはその両者になる、新約に於ける人類すべての解放者として、罪の世から栄光への脱出を先導してくださるためにご自分の命を捧げてくださったのです。

